

# 「残念」地元へ衝撃

## 苦悩する短大

### 募集停止の余波

〇下

奈良佐保短大(奈良市鹿野園町)が2025年度以降の学生募集停止を発表してから約1カ月余り。在校生や大学関係者のほか、卒業生や地域住民にまで波紋が広がる。一方で、約2年後に迫る閉校後のキャンパス跡地利用について検討が始まった。長年にわたり、地域に根差してきた短大の模索は続く。

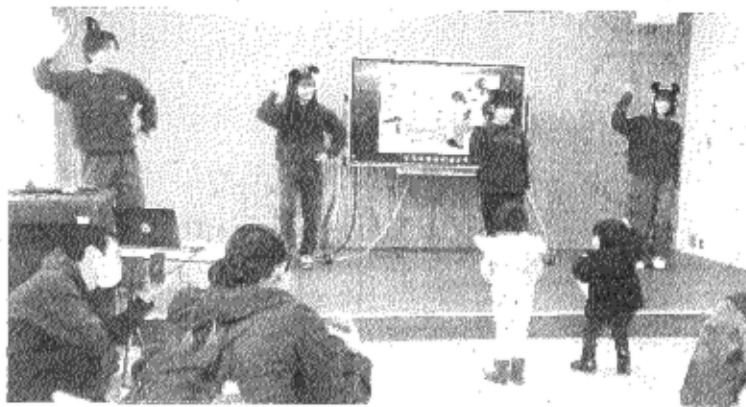
(谷村 隆城)

▽動揺広がる  
同短大は昨年12月23日の理事会で募集停止を決議する。同月27日には文部科学省に報告後、学生たちを集めて報告した。  
同短大1年生の女子生徒(19)は「募集停止はびっくりした。少人数が気に入ったのに」と動揺を隠し切れない様子。  
同大学入試・広報センターによると、今春の入学や在学学生への教育や進路支援などは、これまで同様に

短大向かい側の近くに「トラン鹿野園」がある。県は県護国神社が鎮座する。認定の「眺望のいいレストラン」にも選ばれ、学生の核といえる。にぎわいがなくなる。残念でならない。

## 大学側「学ぶ機会守る」、跡地利用も焦点

「閉校を惜しむ。キャンパス内には一般市民も利用できる学食「レス」や「ゆめの丘SAHO」も開放される。また、奈良市の委託を受けては「白紙の状態」。先月、しっかりと今後の大学運営や跡地の活用を検討し、せび会」の役員会が開かれ、ていくと話す。おわり



地域の子どもたちがダンスなどを楽しむ奈良佐保短期大学の「こどもフェスタ」=昨年11月18日、奈良市鹿野園町

同大学と地域住民とのつながりは深く、毎年秋にはキャンパス内を開放して恒例の「こどもフェスタ」を開催している。同大学によると、閉校後も学食「レス」や「ゆめの丘SAHO」も開放される。また、奈良市の委託を受けては「白紙の状態」。先月、しっかりと今後の大学運営や跡地の活用を検討し、せび会」の役員会が開かれ、ていくと話す。おわり

## 記者の目 県内の教育に大損失

開学から90年以上の歴史を持つ奈良佐保短大の募集停止に驚きの声が上がっている。一方で、納得する声も多かった。特に県内の高校や大学関係者などに取材を進めると「短大離れ」が顕著であることが分かった。  
大きな要因は2020年度から始まった高等教育の修学支援新制度。金銭的理由で諦めていた高校生に4年制大学への進学を強く後押ししている。今後も短大の苦戦は続きそうと、他校との差別化や特殊性などが求められる。  
2年後には奈良佐保短大が閉校する。同短大は海外からの留学生やセカンドキャリアを志す人の受け皿にもなってきた。同短大の閉校は県内の教育にとって大きな損失ともいえる。  
また長年にわたって地元へ根差してきただけあって、跡地利用については地域住民の意見を反映させるべきだろう。(谷村隆城)

「エスタ」を開催している。大学側から出席者に募集停止の説明があった。卒業生からは閉校を惜しむ声とともに、跡地利用についての提案があった。同大学によると、福祉施設の開設などを検討しているという。

同短大の総敷地面積は3万5000平方メートル。校舎や講堂、食堂、体育館施設などは「まずは学生や新入学生の学びの機会を守る。地域に根差してきた大学なので、閉校後の跡地利用について根差してきた大学なので、